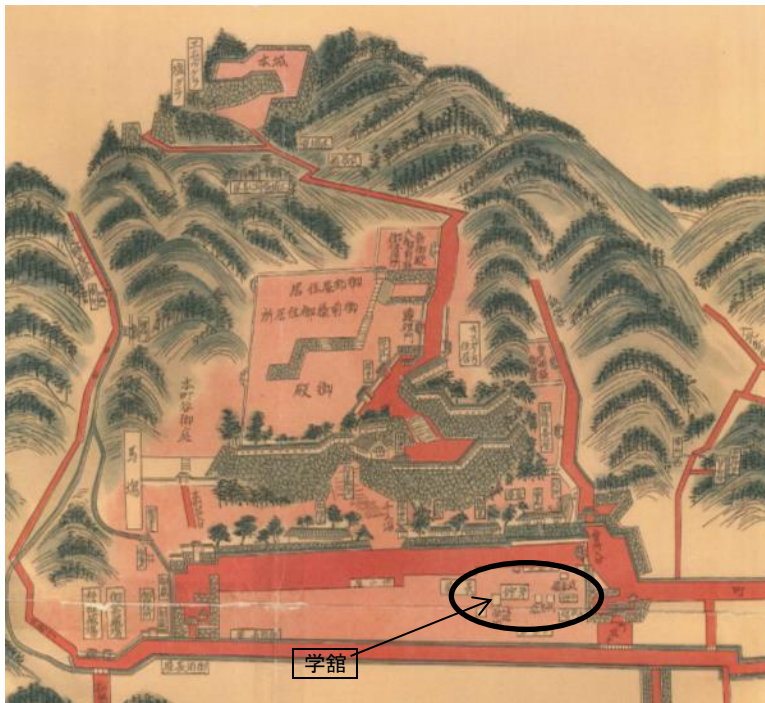


藩校「敬学館」跡を確認しました！！



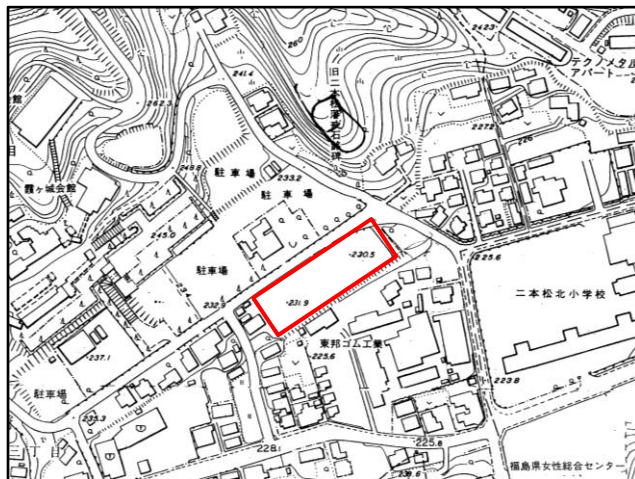
『二本松御城郭全図』と調査位置

二本松市教育委員会では平成28年9月から12月の4か月間、開発に先がけて二本松城跡前の砂利敷きの駐車場、昭和63年(1988)頃までは簡易裁判所と検察庁が建設されていた場所の試掘調査を実施しました。この場所は文化観光施設の建設予定地とされましたが、江戸時代の絵図面では“学校”あるいは“学館”と記されていることから藩校「敬学館」が所在していたことが予想されたため、平成21年度に実施した第14次発掘調査に続き、追加調査を実施してその存在を確認することとしたものです。



市指定文化財「扁額“敬学”」(丹羽長富揮毫)

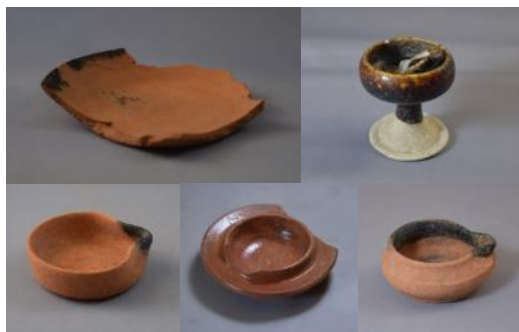
藩校といえば、享和3年(1803)に完成した会津藩校「日新館」が有名ですが、二本松藩においても9代藩主丹羽長富の代に藩校「敬学館」が整備されました。これは文化14年(1817)に創設された藩士の子弟を教育するための学校で、これまで各教授の私邸で行われていた私塾を1カ所にまとめて行えるようにしたものです。素読や儒学、礼法などを教える文学校と馬術、槍術、剣術などを取り扱う武術校をまとめた共同学習機能を備えた学校で、慶応4年(1868)の戊辰戦争で焼失するまでは、二本松少年隊として出陣した少年たちも、ここで勉学に励んだと思われます。



調査位置図

これは文化14年(1817)に創設された藩士の子弟を教育するための学校で、これまで各教授の私邸で行われていた私塾を1カ所にまとめて行えるようにしたものです。素読や儒学、礼法などを教える文学校と馬術、槍術、剣術などを取り扱う武術校をまとめた共同学習機能を備えた学校で、慶応4年(1868)の戊辰戦争で焼失するまでは、二本松少年隊として出陣した少年たちも、ここで勉学に励んだと思われます。

調査の結果、平場の北東部に東西 17.2m、南北 8.7mの東西に長い建造物が確認され、通常の侍屋敷に比べて灯明具が大量に出土するという特徴がみられました。灯明具を多く用いる施設として「学校」はふさわしいと考えられることから、絵図面で示された「学校」を構成する建造物、いわゆる“校舎”の跡であると思われます。この建物の南側には“つく



敬学館出土の灯明具

ばい”と“池”が検出され、茶道具である碗が出土することから、茶室を備えた庭園があったとみられます。また、平場南西部には6×13.4mを測る南北棟の蔵跡が東西に並んで2棟が発見されました。絵図では2棟の「武器蔵」が描かれており、今回発見された蔵跡も同じ機能をもつものかもしれません。最後に、箕輪門前の



敬学館検出の“つくばい”



敬学館出土の茶碗



敬学館検出の蔵の基礎

通路幅が再確認されたことも大きな成果です。箕輪門下を流れる二合田用水と平行する石列や溝跡が検出され、この石列の南北で整地土層の違いが確認されました。北側の土層が焼土や炭化物を含まないことから幕末には建造物が無い範囲、すなわち通路であることが明らかとなり、二合田用水の水路壁から計測すると通路幅は16.2m（9間）、東西の延長は約55m確認することができました。

以上のことから、藩校「敬学館」が記録どおり文武両道の設備を備えたものであったことが明らかとなり、また城跡正面にふさわしい空間が確保されていたことが再確認され、藩校の存在とあわせて、箕輪門前の景観を復元するに足る重要な結果が得られました。